

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：82720

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370153

研究課題名(和文)「東国様式」を再考するための中世鎌倉地方絵画の総合的研究

研究課題名(英文)Comprehensive Study on Kamakura region paintings in the Middle Age

研究代表者

梅沢 恵 (Umezawa, Megumi)

神奈川県立金沢文庫・学芸課・主任学芸員

研究者番号：60415966

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、鎌倉地方に関連する中世絵画について絵画制作の実態の把握、流通及びそれを可能にしたネットワークを明らかにすることを目的とするものである。作品調査、文献資料を収集、蓄積することにより中世東国における絵画制作の実態について考察した。特に、室町時代の禅宗の主流となった夢窓派の拠点として創建された円覚寺黄梅院に注目した。また、夢窓の高弟が東国に創建した寺院を追跡することで、黄梅院の初代院主となった方外宏遠が創建した寺院の旧本尊や頂相彫刻を再発見し、夢窓派のネットワークを通じて京都から頂相などの絵画が鎌倉に移動した具体的な事例を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research, understand the actual situation of Kamakura local medieval painting, it is an object to clarify the network that enables distribution and the same. In the work study, collected the historical literature, were discussed actual situation of painting in the Middle Ages. And, In particular, focused on Obai-in of Engaku-ji temple, which was built as a base for Faction of Muso Soseki. His disciples became the mainstream of the Zen of the Muromachi period, and they built many temples in eastern provinces. And, it was found that there are many Buddhist statues and paintings that have been produced in Kyoto in such temples.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術史 鎌倉地方絵画 「宋風」 夢窓疎石 頂相 外来文化受容 一遍聖絵

1. 研究開始当初の背景

日本美術における外来文化の受容については美術史学にとって大きな問題であり、中世の美術については中国の宋・元時代の文化の移入が多大な影響を及ぼしたと理解されている。とりわけ「宋風」というテーマについてはこれまでも重要な論点となってきた。

鎌倉は大陸文化の摂取に積極的な場であったと考えられ、鎌倉地方に伝存する日本製の絵画について従来、中国絵画を受容した「宋風」様式、「東国様式」という評価が与えられてきた。しかし、鎌倉地方で制作されたことが確実な作例は限られており、個別の作品の調査を進め、伝来について精査するとともに基礎的な作品データの蓄積が必要と考える。

応募者は「舶載仏画を規範とする十六羅漢図の図像受容と展開に関する研究」(若手研究(B)2006～2007年度)、「中世鎌倉文化圏における絵画制作と外来文化受容に関する研究」(若手研究(B)2009～2011年度)において、羅漢図、涅槃図などの仏画を中心に鎌倉地方の絵画における舶載画の受容について研究を進めており、これらの研究は本研究で探究した問題とも密接に関わっている。

2. 研究の目的

鎌倉は幕府により港が開かれ、建長寺や大仏の造料船が数度にわたって派遣されるなど、大陸の文物がもたらされ、さらに来日した中国僧たちによって禅宗寺院を中心に規式や儀礼とともに頂相などの絵画が直に伝えられた。たとえば、円覚寺塔頭の南北朝期の財産目録である「仏日庵公物目録」には三十七幅もの頂相をはじめ、水墨画や羅漢図、十王図など夥しい数の舶載画が記載されている。

しかし、一方、金沢文庫文書によれば、金沢北条氏が京都の絵師に壁画の制作を依頼して中央の美術が導入された事例も確認できる。つまり、鎌倉という場が舶載画が多く伝来した地であること、個々の作品の制作地の問題をわけて考える必要がある。本研究では、個別の作品研究を進めることにより、先行研究においてどのような点が東国的な表現と評価されてきたのか、他の地域にはない鎌倉地方の固有の画風をみとめることが可能か否かなどについて検討する。そのうえで、「東国様式」という枠組みを再考し、新

たな鎌倉地方の絵画史観の構築を目指した。

3. 研究の方法

本研究では、鎌倉地方に伝来する中世絵画作品を中心に作品データの収集し、データベース化を進めた。文献資料により鎌倉にかつて所在したと考えられる絵画制作の記事や画家に関するデータ等についても収集・蓄積した。特に、金沢文庫文書の唐物関係資料などから交易によってもたらされた舶載画についての同時代的な評価、価値観を探った。

また、夢窓疎石、夢窓派の周辺の絵画作品の研究を行い、鎌倉末から南北朝時代における京都、鎌倉間における人と物の移動、流通を具体的に考察した。中世絵画を多く所蔵する寺院を重点調査の対象とし、悉皆的な調査を行い、必要に応じて所蔵絵画目録を作成した。(『天龍寺慈濟院所蔵絵画目録』)。また、臨濟宗円覚寺派寺院を中心に文化財の悉皆調査(継続中)を実施した。

4. 研究成果

本研究の成果として代表的なものを次にあげておく。

鎌倉地方伝来の絵画の調査・研究

中世絵画を多く所蔵する寺院を重点調査の対象とし、悉皆的な調査を行い、写真を付した所蔵絵画目録を作成した。具体的には、南北朝期の塔頭の財産目録「仏日庵公物目録」があり、中世絵画を多数所蔵する円覚寺派寺院および唐物関係資料など同時代の文献資料に恵まれる称名寺の絵画調査を行った。また、現在までに散逸してしまったものを補完するために、文献資料により鎌倉地方にかつて所在したと考えられる絵画制作の記事や画家に関するデータ等についても収集・蓄積した。

従来、鎌倉地方に伝存する絵画について、制作地の問題について詳しく検討されないまま「宋風」、「東国的」などと形容されてきた。しかし、個別の制作事例をみると、鎌倉地方に所在する作品の中には少なからず、京都で制作されたものが含まれている。そして、鎌倉地方に伝来したために「地方様式」などと特殊な語られ方されてきた作品について個別の作品研究を進めることで美術史上の意義について再考した。

梅沢恵「冷泉為恭筆釈迦三尊像模本」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』40、神奈川県立歴史博物館、2013年。梅沢恵「龍華寺所蔵釈迦十八天像」『金沢文庫研究』334、2015年。

夢窓派周辺の絵画制作に関する研究

夢窓疎石、夢窓派の周辺の動向に注目し、鎌倉末から南北朝時代における京都、鎌倉間における人と物の移動、流通を具体的に考察した。特に夢窓疎石の没後、夢窓派の東国における拠点として円覚寺黄梅院が創建されたことに注目した。歴代の院主となった夢窓の高弟が東国に創建した寺院を追跡することで、夢窓高弟の頂相彫刻(方外宏遠坐像、海蔵院所蔵、南北朝時代)や仏像造像(銅造十一面観音立像、昌清寺所蔵、南北朝時代)を再発見することができた。

さらに、光明寺(神奈川県相模原市緑区)の月江正印龕のある夢窓疎石の頂相が円覚寺黄梅院を經由して京都からもたらされたことを解明することができたのは、大きな成果の一つであった。本図は京都から東国へ頂相を移動した事例と考えられ、光明寺文書とともに展覧会の展示、図録等で成果の一部を公表した。

梅沢恵「津久井光明寺文書がつなぐもの 中世鎌倉文化圏における夢窓派の動向と美術」『津久井光明寺 知られざる夢窓疎石ゆかりの禅院 2つの宝積寺を訪ねて』神奈川県立金沢文庫、2015年

円覚寺本五百羅漢図研究

鎌倉文化圏における外来文化の受容、作品の移動の問題を考える上でさまざまな課題を内包する重要作品である円覚寺本五百羅漢図(50幅)に関する研究を行った。

梅沢恵「五百羅漢図」(解説)『國華』1437号(特輯狩野一信)、2015年7月。梅沢恵「鎌倉・円覚寺の五百羅漢図について」(平成27年度科学研究費学術研究助成基金助成金 基盤研究(A) 研究代表者:井手誠之輔「作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究」による五百羅漢図研究会口頭報告)於:九州大学、2016年3月。

一遍聖絵研究

一遍聖絵は法眼円伊という作者名が知られ、正安元年(1299)の年記がある基準作であるが、絹本に描かれた他に類例のない孤高の絵巻である。本絵巻はしばしば「宋風」と形容されてきたように、那智滝の周囲や伊予岩屋寺の屹立する岩山の皴や、久美浜での龍の出現にみられる黒雲、小野寺の場面での湿潤な

大気の表現などに中国画からの水墨技法の受容が見て取れる。一遍聖絵の制作時期は称名寺阿弥陀堂障子絵の制作が「唐絵」の名手という京都の絵師に依頼した時期とほぼ重なる。金沢北条氏が「唐絵」の制作を依頼した同時代の京都において、中国画の技法の摂取が顕著に認められる作例として注目し研究を行った。その成果の一部は所属する博物館で開催した展覧会(特別展『国宝 一遍聖絵』遊行寺宝物館、神奈川県立歴史博物館、神奈川県立金沢文庫で三館共催、2015年)の展示、図録、講座、シンポジウム等で公表した。(梅沢恵「一遍聖絵における景観表現の多様性」『国宝 一遍聖絵 別冊金沢文庫篇』、pp.47~50、神奈川県立金沢文庫、2015年11月。梅沢恵「図像的解釈の試み」(国宝一遍聖絵展記念シンポジウム「国宝一遍聖絵の全貌」口頭報告)於:東京国立博物館、2015年11月15日。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

梅沢恵「中世鎌倉における華厳美術の移入と受容について」『東大寺 鎌倉再考と華厳興隆』(展覧会図録)、pp.103~105、神奈川県立金沢文庫、2013年10月

梅沢恵「冷泉為恭筆釈迦三尊像模本」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』40、査読無、pp.53~61、神奈川県立歴史博物館、2013年

梅沢恵「五百羅漢図(図版解説)」狩野一信特集号、『國華』1434、pp.40~44、査読無、2014年

梅沢恵「称名寺伝来の三千仏図と仏名会」『仏教美術逍遙』pp.53~56、神奈川県立金沢文庫、2014年

梅沢恵「五百羅漢図(図版解説)」『國華』1434、pp.40~44、査読無、2015年7月

梅沢恵「龍華寺所蔵釈迦十八天像」『金沢文庫研究』334、pp.28~35、査読無、2015年

梅沢恵「津久井光明寺文書がつなぐもの 中世鎌倉文化圏における夢窓派の動向と美術」『津久井光明寺 知られざる夢窓疎石ゆかりの禅院 2つの宝積寺を訪ねて』pp.65~72、神奈川県立金沢文庫、2015年

梅沢恵「一遍聖絵における景観表現の多様性」『国宝一遍聖絵 別冊金沢文庫篇』、pp.47~50、神奈川県立金沢文庫、2015年11月

[学会発表](計 1件)

梅沢恵「図像的解釈の試み」(国宝一遍聖絵展記念シンポジウム「国宝一遍聖絵の全貌」口

頭報告)於：東京国立博物館、2015年11月15日。

〔図書〕(計 2件)

『中世絵画のマトリックス』(共著)、梅沢恵
「矢を矧ぐ毘沙門天像と「辟邪絵」の主題」pp.383
～403、2014年3月

『仏教美術論集7 近世の宗教美術 領域の
拡大と新たな価値観の模索』、共著、梅沢恵「増
上寺所蔵一信筆五百羅漢図における図像の継
承と『新様』」pp195～213、竹林舎、2015年

6. 研究組織

(1)研究代表者

梅沢 恵 (UMEZAWA MEGUMI)

神奈川県立金沢文庫・学芸課・主任学芸員

研究者番号：60415966